

落花生の可能性

金山町において、平成30年度から試験的に栽培を開始した落花生。

山形大学東北創生研究所と株式会社でん六、そして金山町が地域農業振興協定を結び、「新たな産地にしよう」と取り組んでいます。

落花生の原産地は南アメリカのアンデス山脈のふもと。もともとは乾燥した荒地に生まれた植物です。



国内の生産は千葉と茨城の両県で80%を占め、寒冷地では大規模な栽培例がありません。本当に金山で落花生が栽培できるのか――。

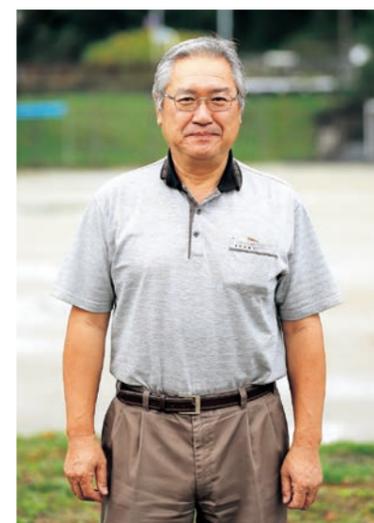
栽培を始めて2年。

ついにピーナッツとして皆さんの手に渡り、今後は生産量も増加する見込みです。

いま、少しずつ根を張り始めた落花生産地化プロジェクト。

本号では、金山町における「落花生の可能性」を探ります。

持続可能な地域農業へ 落花生を起爆剤に”転換“



山形大学 東北創生研究所
村松 真さん

直面する農業の大転換期にどのように向き合っていくか——。意欲や工夫次第で自分に合った農業を実現できます。種類の豊富さや収益性等を考えると、注目すべきは園芸作物。その選択肢のひとつとして導き出したのが「落花生」です。

農業における大きな転換期 ここが出发点

現在の農業を取り巻く環境は、人口減少や少子高齢化の進展などにより厳しさを増しています。さらに平成30年度からは生産調整が廃止されました。このような状況の中で地域農業は、自らの目標を設定し、自らの創意工夫を凝らして持続可能な農業に取り組みなければならぬ時代、いわば大きな転換期を迎えています。「この転換期は、もはや一市町村だけでは乗り切れる状況ではない。今

こそ、地域の産学官が連携しながら次世代の農業構築に取り組む必要がある」と、山形大学東北創生研究所の村松真さんは話します。

村松さんが、産学官連携の農林水産業振興施策に取り組むモデルケースの構築を検討していたところ、白羽の矢が立ったのが「落花生」。「県内に国内有数の豆菓子メーカーが存在したことも、事業を後押しした」と話し、株式会社でん六（以下、でん六）に協力を依頼したといいます。

日本財団「わがまち基金」で採択され、9月2日に記者発表された。協定を締結している3者のほかに関係者が並ぶ。



栽培方法を工夫することで 落花生の一大産地に

山形大学東北創生研究所では、平成28～29年度に、真室川町で落花生の栽培試験を行ってきました。「豪雪地帯でも十分に栽培できることが分かった。落花生は、あまり手間が掛からない省力作物であり、病害虫にも比較的強い。戦略作物として相応しいと考えられる」と、村松さんは試験結果を振り返ります。当地での栽培技術が確立されていない状況でのスタートとなりましたが、ここまでの

成果を「1年半で商品開発までできたのは異例。順調に事業は進んでいる」と評価します。

さらに追い風となるニュースが。協定を結んだ3者で進める落花生産地化プロジェクトについて、日本財団「わがまち基金」と国の「地方創生推進交付金」の交付が決定したことです。これは本プロジェクトが地域の活性化に寄与すると期待されている証し。機械の購入代金などに充てて、さらに産地化を加速させます。「行政の補助事業はお金が切れたら終わ

りだ」と村松さんは話し、その後の商品開発などは、民間主導で持続可能なモデルを追求すると強調します。

現在、千葉県が圧倒的なシェアを持つ国内産は、国内消費に対して供給量が極めて少なく、海外産でまかなっています。そういった状況の中で、国産落花生を求める消費者の需要は強いといえます。寒冷地での産地化は例がありませんが、栽培方法を工夫することで「一大産地になる」と村松さんは断言します。

金山の園芸作物と言えば「ニラ」 ベテラン農家にインタビューしました



ニラ栽培を始めて30年以上 高い品質と収益性が魅力

ニラ農家
天口 直浩さん（上台）

ニラ栽培を始めて30年以上、当初は小規模でしたが、転作田などを活用し面積を拡大して、現在は1.6ヘクタール程のほ場に栽培しています。

金山のニラシーズンは概ね5～10月。一度刈っても25日程度で立派に生育します。刈り取り回数が増えるほどに品質が落ち、選定作業にかかる手間と時間が増加することから、うちでは1株2回の収穫と決めています。

ニラ栽培の良いところはなんといっても高収益であること。しかし、「朝は早いし、臭いがちょっと…」などのマイナスイメージを持っている方もいるはず。否定はしませんが、収益性を考えると、私は大変だとは思いません。また、連作障害がなく、生産管理がしやすい点も大きなメリットです。

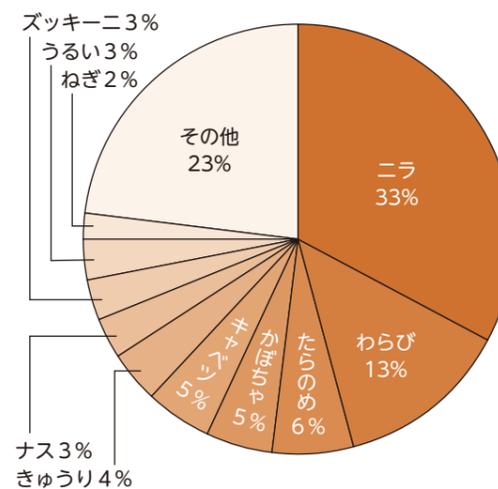
今や全国でもトップクラスの品質と出荷量を誇る最上地域のニラ。先駆けは金山でしたが、近年生産者が減少しています。定植機などの機械も共同利用できますし、種まきも生産者団体で一斉に行うことで省力化できます。ぜひ若い方にニラ栽培にチャレンジしてほしいと思っています。



「運者の菜」という最上広域統一のブランドで出荷しており、品質も十分だ。

●資料2

【転作園芸作物の生産面積】
(平成30年度分/産業課調べ)



●資料1

【町内の農業者数】
(細目書ベース/産業課調べ)

年度	農業者数
平成27年度	556
平成28年度	542
平成29年度	527
平成30年度	505
令和元年度	501

●資料3

【落花生とニラの10アールあたり粗収益等の比較】(推定平均値/産業課調べ)

■落花生		■ニラ	
粗利率	131,000円	粗利率	1,218,000円
所得	78,000円	所得	498,000円
労働時間	69時間	労働時間	480時間
時間あたり所得 (所得÷労働時間)	1,130円	時間あたり所得 (所得÷労働時間)	1,038円

その名もピーナッツ おい 美味しく美しく、ここに誕生

この秋、金山産落花生を使った新商品が誕生しました。
たくさんの養分と愛情が詰まった肥沃な土壌で生まれたピーナッツ。
白く輝く甘美なそれに、美味しく美しい「ビ」ーナッツと名付けました。

強く感じた生産者の思い

山形市に本社を置く日本有数の豆菓子メーカー株式会社でん六（以下、でん六）。3者協定の「産」を担う当社は、町での栽培技術指導や生産された落花生の買い取りを行います。また、商品開発によって付加価値を生み出すことも当社の大きな役割です。



担当者の倉田さんは、足しげく町を訪れ、栽培指導を行ってきました。「金山の皆さんにとって、落花生栽培は初めてのことで。農家でもない、私のような部外者を受け入れてくれるか不安だった」と当時を振り返ります。しかし、その不安はすぐに払拭されたという。「皆さんから『なんとかしたい』という思いが伝わってきた。まじめで意欲的なのでスムーズにコミ

ユニケーションがとれた」と表情を緩めます。平成30年度産について、「サヤに黒いシミがなく綺麗で、マメの甘みが強い。初年度としては、まずまずの成果だ」と評価します。

素材を最大限に活かして

その落花生を使用した新商品「ビーナッツ」が9月に発売されました。これは、生産者からの丁寧な聞きとりを重ね、美味しく美しい、「ビューティフルなピーナッツ」の意味から命名。関係者が共同で考案することで、作り手にとって「自分たちのビーナッツ」と誇れるブランドとなりました。でん六鈴木隆一社長の「金山産の付加価値を生かすような商品開発を」との思いから、素材本来の味

農家さんのために市場を作るのが私の仕事 ビーナッツは総力をあげてブランド化します

株式会社でん六

企画開発部 豆類研究課

フィールドマン 倉田 大輔さん

を引き出すため、素焼きのみとシンプルに仕上げました。売れ行きも上々で、現在販売しているビーナッツは売り切れ次第終了。「生産量も増えてくれば、素焼き以外の商品も開発していきたい」と倉田さんは胸を膨らませます。

このプロジェクトで注目すべきは、生産された落花生をでん六が全量買い取るという点。もちろん品質によって価格は変動しますが、生産者にとっては高品質の落花生を栽培することに集中できる安心の仕組みです。倉田さんは「農家さんのために市場を作るのが私たちの仕事。金山の皆さんがいくらでも生産できるように、金山町産落花生ビーナッツをブランド化していく」と力を込め、使命感に燃えています。



1_金山町産素焼きビーナッツ。渋皮ごと食べても強い甘みが感じられる 2_でん六鈴木社長もその味に太鼓判 3_素焼きビーナッツ (600円)、素焼きビーナッツ焼印付杉皿セット (3,000円)【ともに100グラム・税抜き価格】はホテルシェーネスハイム金山とマルコの蔵で販売中。在庫限りの限定品で、県外から求めにやってきた方もいたという 4-6_金山小4年生を対象にした「出張ビーナッツ教室」の様子 (10月9日)。自分たちで育てた落花生に児童らも興味津々。収穫方法や良い豆、悪い豆の見分け方などについて学習を深めた

シンボルロゴのこと!



ビーナッツのシンボルロゴには、町から望む山々、金山杉、切妻屋根の金山住宅、大堰を泳ぐ鯉など、町の魅力をちりばめました。落花生栽培が町の未来をより明るく元気にしますように——。そんな思いが込められています。



1_農事組合法人いづえむの皆さん 2_サヤをむくと綺麗なピンク色 3_収穫後、試験的に機械で脱殻 4_掘りたての落花生 5_トラクターに装着した専用の掘り取り機で収穫 6_一株に約50サヤの実がなる 7_30アールのほ場を1日かけて収穫

金山だからこそ作れる甘さで 東北に一大産地を

他産地との差別化を

生産者同士が連携して落花生の産地化を進めようと、平成30年6月に金山町新産地開発協議会を設立しました。初年度は8名の生産者が加入し、43アールに落花生を作付け。「定植時期などの失敗もあった。試行錯誤の連続だった」と会長の青柳栄一さんは話します。それでも収量は1,060キログラム。「1年目にこれだけ出荷できれば、まずは合格」と胸を張ります。

栽培面において、他の国内産地と大きく異なるのが土。千葉県などと比べ、黒土の土壌が良いのが特徴です。青柳会長は「金山の土に合った堆肥を使い、地域内で循環する栽培を進めていく。生産性も上がり、金山産落花生の大きな



金山町新産地開発協議会
会長
青柳 栄一さん (檜台)

特集

落花生の可能性

人に落花生栽培に挑戦してもらいたい」と熱を込めます。協議会では共同利用できる機械を購入しており、設備面でも新たな生産者の背中を押します。

落花生の可能性にかけて

「まめづくり事業」の推進を

栽培の担い手として期待する高齢者が、元気に働ける機会となる

ポイントとなる」と力を込めます。実際に収穫すると、粒も大きく、サヤも白く綺麗な落花生が多いとのこと。「金山だから作れる落花生」を追求していきます。

一人一人の生産面積は少なくとも多くの方に生産してほしい

「課題は生産量だ」と青柳会長は話します。播種や収穫の時期が米の生産と重なることから「稲作農家の転作物には向かないかもしれない。連作障害にも注意が必要だ」と、課題を続けます。

一方で、収穫は1回で済み、管理も除草などの軽作業が中心であるため、新規参入のハードルは比較的低い落花生。青柳会長は「栽培マニュアルも整備した。生産面積は少なくても良いので、多くの

ことが、このプロジェクトのもうひとつの大きな目的です。いわばこの「まめづくり事業」が、元気な農業者の増加と、高齢による離農者の減少につながり、最終的には遊休農地の発生を抑えることができるかと考えます。

地域が抱える問題を解決できる可能性が、落花生には秘められています。

落花生ができるまで

金山町の場合、種まきから135日前後で収穫できます！



①種まき

3センチほどの深さに、2〜3粒ずつ横向きにまく。



②発芽

種をまいて10日前後で発芽する。どんどん葉が大きくなる。



③開花

種まきから約40日です。花が咲き始める。株の根元に土を寄せる。



④中耕

雑草があまり大きくなりないうちに、うね間を耕して除草する。



⑤収穫

試し掘りで適期判断するのが、おいしさのポイント。



⑥乾燥

1ヵ月以上かけてサヤのまま乾燥させる。その後脱殻して出荷。